

国語慣用句大辞典

白石大二編

東京堂出版

国語慣用句大辞典

白石大二 編

東京堂出版

編者略歴

明治四十五年愛媛県今治市に生まれる。昭和一〇年東京大学文学部国文学科卒業。早稲田大学教授。

編著書『徒然草と兼好』（ぎょうせい）『読み手のことを考える書き手のための文法』（早稲田大学出版部）『日本文法論』（法政大学通信教育部）『飲食事辞典』（柴田書店）『日本語の発想』『日本語発想辞典』『国語慣用語辞典』（以上、東京堂出版）など、その他多数。

国語慣用語大辞典

昭和五二年六月二〇日 初版印刷
昭和五二年六月三〇日 初版発行

著者 白石大二

発行者 岩出貞夫

印刷所 有限会社秀和協進社

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十五(〒100)
電話 東京五一一八三六 振替 東京三三三〇

序

『国語慣用句辞典』『日本語発想辞典』を受けて、この辞典を出すことになった。目的は、著者の成句・慣用語の研究に一期を画し、先人の研究成果を回顧して将来の展望を志すにある。

思えば、長い道程であった。昭和十七年慣用句論の一文を草し、昭和二十五年『日本語のイデオム』をまとめ、それを発展させて、昭和三十六年『日本語の発想』とし、ついで、その後の成果を、上述の二書とした。

旧制の中学校五年間に、英語の前田雄三郎・大野武之助の両先生から語学・文法への目を開かれ、旧制高等学校の三年間の生活の一半は、語学の辞書引きであった。英語語源論の授業を受けた村田祐治先生が、くしくも、Idiomology の創設者斎藤秀三郎氏を東都の学界に出されたかたであったことも、不思議な縁であった。ドイツ語を習った、法学者でキリスト者であった、三谷隆正先生からは、語学は辞書を引くことと教えられた。

それにしても、大学で受講し、卒業後、辞書編集の基礎作業で親しく指導を賜った橋本進吉先生が、今改めて著作集に接すると、実に深く語構成をつまびらかにする語源学者であった。先生から、これらの本の中核をなす格論を体得したのである。

先生がたから与えられた絶大な恩恵に対して、この本がせめてのお返しとなることを願うこと切である。

終わりに当たって、五味智英・乾亮一の両氏にも、感謝の意を表したい。五味氏は、大学卒業後ずっと東京で学究生活を続けることができるきっかけを作ってくださった。氏の紹介で西尾実先生のお手伝いをするようになった。恩師の元愛媛県立今治中学校長、東京府立第三中学校長秋山四磨先生の下で働くことができるようになったのである。英語学者乾氏からは、大学以来、いろいろ語学上の知見を授かった。慣用句に絶えず目を向けるようになったのは、一つは氏との交友による。

昭和五十二年四月二十七日

白石大二

凡例

一 この本のしくみは、第一部（慣用句大辞典、本文）・解説（慣用句の構造・特性、研究史など）・第二部（総索引、語・成句索引）から成る。

二（1）第一部本文は、五十音順に配列し、各項とも見出し（見出し語）・意味（定義・説明）・用例（出典）から成る。

（2）①見出しは、原則として、複合語・成句の形で掲げる。単独語で掲げるものは、慣用句的のもの、指示語、擬声語・擬態語の類とする。

②見出しは、この本の趣旨からいって、現代に生きている慣用語の言い方をもとにして掲げる。たとえば、原則として助詞「が」「を」を明示した形で示す。ただし、古語の言い方のままで固定したものなどは、その形による。打ち消しの助動詞「ぬ」「ん」などは、現代語の「ない」に改めたり統一したりしない。

（3）①意味は、まず語・成句の構成に即して、その語性に合うように、現代語として不自然でない言い換えをし、ついで、他の条件が付け加わった意味のものを言い換える形で示し、必要に応じて、その語・成句のさす事柄の説明を加える。このとき、同じ類型のものは、この本に掲げた語・成句を通じ、一貫して同じように説明する。これは、やが

て、その類の語源的探求に役立つものである。このことについては、解説に述べる。

②意味の類別は、単に語・成句の構成によるだけでなく、慣用語の性質上、その全体としての使い方にもよる。たとえば、「骨を折る」でも、ことばどりの使い方の時と、それに付加された意味の時とを区別する。ことばどりの時でも、何の骨かで違ってくる。付加された意味の時でも、使い方によって意味合いが違ってくる。従って、細かく分類することがある。原則として、①②③により、それをまとめるものとして①②③により、更に細かく分けるときに、⑦④⑦による。①②③を立てる必要のないときには直ちに⑦④⑦による。

（4）①用例は、原則として、引用書の時代順に掲げる。

②個々の用例は、例文・引用書名作者（著者）名から成る。例文には、適宜、異文、同種の文、注釈を示す。

③個々の用例は、への中を示し、その中に、例文・引用書名作者（著者）名を示す。引用書名・作者（著者）名は、（へ）の中に示し、上に引用書名、下に作者（著者）名を示し、・によってくぎる。引用書には、適宜、小字で章編段などを付記する。章編段などを示すのは、その引

用文の背景を明らかにし理解を助けるためである。

万葉集などでは、巻名・歌番号を示す。和歌・俳句などについては、作者名は、例文の前後に示して、()の中に示す方式によらない時がある。

俳句などで、いくつもの出典のあるものは、適宜、その一つを注記する。

④異文、同種の文は()の中に示し、注釈は()の中に示す。異文とは、たとえば、平家物語・源平盛衰記などは諸本による本文の異同を示し、同種の文とは今昔物語集・宇治拾遺物語などは同じ説話の本文の異同を対比して示して、参考に資する。注釈は、異説のあるもの、新説などを適宜示す。

⑤個々の用例、又用例の末尾に、必要に応じて、○を冠して、適宜に、関連する語・成句の用例などを注記する。

⑥作者(著者)名には、日本古典全書・日本古典文学大系・日本古典文学全集・各文庫類で示すものがある。異文などを示す時にも、適宜、この方法による。

⑦用例の表記は、古典については、原則として引用書により、送りがなを欠くものなども、最少限活用語尾を送る

にとどめる。ただし、踊り字は使わないことにする。漢字の読みは、現行の音訓の使用を考え合わせて、できるだけ多く付する。かなは、和蘭字彙などを別として、原則としてひらがなによる。

明治以後のものについては、送りがな・踊り字に至るまで、原文のままとする。ただし、岡谷繁実著『名将言行録』の類は、明治以前のものに準ずる。

なお、漢字の字体は、現行の漢字による。

二つ以上の段落にまたがる用例については、前後の段落の間を一字あける。和歌を含むものなどについても、この方法による。

(5)見出し語で、『国語慣用句辞典』と重なるものには、右肩に*の符号、『日本語発想辞典』と重なるものには、同じく右肩に※の符号を付した。なお、意味の部分にも適宜に*※の符号を付し、参照の便に資した。

三 第二部総索引は、本文の見出し語、見出し語の中の各構成語(原則として、付属語については、特殊なものに限る)を中心に五十音順に並べ、複合語・成句の類は同種のものを一括して掲げる。

DM99/15

- 1 この索引は、この本の本文・解説に掲げる慣用語句（成句）に語句例を補い、それらを五十音順に配列し、その中を類別してまとめたものである。
- 2 この本にいう慣用語句（成句）は、(1)人間の声、鳥獣の叫び、物の音、事の様子を表す語（感動語・擬声語・擬音語・擬態語）、(2)応答語・あいさつ語など、国語特有の語句から、(3)成句、ひゆ的表現、二語以上の語から成って個々の語のなす以上の意味を表すもの、特別なひゆとなっているもの、狭義の慣用語、(4)それらの語句構成に特別な文法的特性の見られるもの、格助詞の国語の特性に関するもの、さらに、(5)それぞれの時代、その階層、職業などに対する個性的な表現、特に、それらが後世に影響をとどめているものを含む。それらを、その語句構成の特質、その中心をなす語・語句をもとに、まとめる。ことわざ・格言などには、そういう言い回しの問題となるものがある。その点にも触れる。
- 3 本文・解説と対照する時は、(1)本文に掲げるものは、本文では、五十音順に並べたその部分を見る。表記は見やすくするため改めたものがある。他に対照箇所のある時は、読点で切って、その後を示す。(2)特に、その部分を中心としてまとめたものの類は、問題の部分以外を（ ）で包んで示す。本文の部分では、全体で見る。(3)解説に掲げるものは、ページを示すので、その部分を見る。
- 4 なお、語句例を補ったものについては、(1)本文・解説の中の文例等から補うものは、→でその語句を示す。(2)他の文献等から補うものは、()に包んで、簡単に出所を示す。本文の見出し語句の類と併記する時は、〈 〉に包んで示す。見出し語句を設けて後に示すこともある。
- 5 まとめ方は、(1)同語・同音異義語は、体言・擬声語・動詞・形容詞・形容動詞のような順序による。(2)複合語・派生語の類は、原則としてその中心をなすと考えたものの所に集める。(3)用言の類では、㊦単独語は活用形の順序に並べる。㊧複合語はその後に並べる。㊨派生の名詞・複合名詞の類は、その後に並べる。㊩適宜、見やすいように配列のくふうをする。
- 6 語句には、適当に〔 〕で包んで、使い方・意味等を注記する。
- 7 ことさら出所を示さないもので本文・解説に見えないものは、そこにあげた語句例で分かるものである。なお、適宜、『国語慣用語辞典』『日本語発想辞典』などを参照していただきたい。
- 8 和語・漢語・外来語・外国語にわたるので、その類別もしてある。

目次

序	前付一～二
凡例	前付三～四
国語慣用句大辞典	三～五四
解説	五七～五九三
語成句索引	五九五～六四

国語慣用句大辞典

あ

あ とつさに口を大きく開いて発する声。

へやいやいやい。狼狽者。肌は経れても経れいでも。我が子に不義を仕かけた畜生。侍の身で高安殿が。助けて置かしやる様なければ。何の今迄存命へて。うかうか爰へ何しにこう。ア隠すより顕るるはなし。親はないと云はしても。有る事知つて、娘が手から度々の合力金。二人が命を養うたは。皆高安殿の御厚恩。(撰州合邦辻合邦内の段。昔専助)

あ (ああ・あつ) 感ずる声。感嘆する声。

意外だと思ふ声。へさて説法をはりて、尼公其の辺の聴衆まで皆よびあつめて、大なる桶に酒を入れて取り出してすすむ。能説房一座せめて、さかづきとりあげてのみけり。此の尼公あさましく候ひける事かな。酒に水入るるは罪にて候ひけるを、知り候はざりけるよといふに、水のすこし入れたるだによし。今日いかにめでたくあらんと思ふ程に、能説房一度のみて、あ、といひければ、いかによかるらん。感ずる声かと

あ—ああ

聞くほどに、日来はちと水くさきけにてこそ候ひつるに、これはちと酒くさき水にて候はいかに、と云ひければ、さも候らん。酒に水入るるは罪ぞ、と仰せられ候ひつる時に、是は水に酒を入れて候とて、大桶に水を入れて、酒を一鍬ばかり入れたる。此の尼公興懷にしたりけるにや。又悪しく心得たりけるにや。(貞享三年板沙石集六、六能説房説法の事・岩波文庫)(能説坊、
「ああ」と云ひければ、「いかによかるらむ。感ずる音か」と、聞くほどに、(寛保本沙石集六、一六・日本古典文学大系)能説房、あつと云ひければ、如何によかるらんと感ずる音かと聞くほどに、(校訂広本沙石集六、一一)

ああ 感動して発する声。反応を示す声。反省して発する声。(法皇あつばに入らせおはしまして、「物どもも参つて猿楽つかまつれ。」と仰せければ、平判官康頼参りて、

「ああ余りにへいじの多う候に、もて酔うて候。」と申す。(平家物語一、鹿谷)へああ降つたる雪かな、いかに世にある人の面白う候らん、(略)けふの寒さをいかにせん、あら面白からずの雪の日やな。(鉢の木・謡曲集)へ爺親も。心の底は子を思ふ歎きを。見せじとかぶり振り。「アアイヤイヤ我が子でも悪人を不便と思ふは天道へ敵

対。(略)」と。招り赤めたる恩愛の。涙かくせど悲しさは。声の曇りに顯はれし。

(撰州合邦辻合邦内の段・昔専助)(「ア、」と合邦は強いて強気な口調。(日本古典文学大系脚注)へしたがまんざら惡な他人の死んだやうにも思はぬ故。思はず涙が。ムムハハハハ。アアイヤイヤ涙は出ねど。コリヤコレ年の科。ガ此の目がかすんでかすんで(同)(「ア、」と一旦は涙を拭うが、「かすんで」)と再び愁い。(同)へ母親は。「アレアレ聞いてか合邦殿。云ひ訳が有るといひ。ママママア聞いてやつて下さんせ。ハテ娘と思へば義理もかける。ガ幽霊を内へ入れるに。誰に遠慮も有るまいぞえ。」ムムアアいか様のう。此の世を放れた者なれば。世間を憚る事もないかい。そんなら早う呼びこんで。茶演でも手向けてやりや。アア可愛や立ち寄る所はなし。幽霊も喋ひだるかる」と。身を背けるは泣く百倍。(同)(「ムウ」と考え込んだ後、「ム」と息で軽くうなずき、女房の言葉にはつとして「ア、」。(同)へガ又高安殿が今日まで。うぬを助けて置かつしやる御心底を推量するに。元齊は先奥方の婢。後の奥方に引つ上うと有つた時。違つてじたい仕をつたを。心の正直懇望でむりやりに奥方なり。アア手をか

けず奥様共云はさずば。今此の時儀にも及ぶまい。殺さばやならぬ様になつたも。皆我が業とお身の上を返り見て。親への義理に助けさつしやるを。アア有りがたい。恥かしいと思ふ心がけし程でも有るなら。警へどれ程惚れてをつても。思ひ切るに切れぬと云う事はないわい。(同)「ア、手を」と顔をそむけて、通俊の反省を推量する体。(同)「俊徳丸「略」と。宜ふ声を聞き取る門口。「アアイヤイヤ。下郎めは先刻より。始終の様子承る。此の所にござ有ること里人の噂に聞けば。若し敵方へ洩れては大事。一刻も早くお供せん」と。気をせく折しもかけ出る玉手。(同)「(「ア、…」は奴詞(略)。(同)「へどうだ。世間は落着いたらう。エ、先月二十七日日サ。松方の所に行つて、高島も西郷も来てネ、ひどく言つてやつたよ。樺山は居なかつた。ア、歌がやつたらあな。(海舟語録明治三九・一〇・一七)「ア、さうかい、さうだらう、田中は知らないのだネ。何か、もち上りさうかエ。どうせ、血を見ずには、止むまいよ。一つ騒ぐ方がいいのサ。(略)星は何処のものだエ……ア、さうかエ……さうだらうな。アレだけ悪まれるのだから。(同明治三二・一・二)「あゝ唯恥かしきは世人の万人よりは君一人の見

る眼也。高山こそは小事の得喪によりてかくも迷ひ惑へるよと想はれむことの口惜しさよ。願ひ思ふ所詮はたゞ／＼笑て是の一局面の通過を眺められよ。(樗牛全集五想華及消息、明治三四・一一・一五鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)「あゝ汚らわしい」

あゝ(応答) いやいや承知する声。不承不承な返事。(主(略)すなはち汝に言ひつくる程に討つて来い。太郎冠者あゝ。まああとは不返事なが、後日に討ち洩らしたなどといふ事を聞いたらば、汝までをただは置くまいぞ。太郎冠者あゝ討つて参りませう。(武悪・日本古典全書)「主いやいや。この間中より見合はすれど、今日が一晴れ間ぢや程に早う行け。シテあゝ。まああとは不返事なが、おのれ行くまいといふ事か。シテいやさやうではござりませぬ。まていとい行くまいか。シテあゝ参りませう参りませう。(木六駄・日本古典全書)

あゝ(自問自答) 思い出した時に軽く発する声。今さあ、よく覚えてませんな。あゝ、軽井沢に一つ別荘を買ったかもしれせん。しかしこれもですよッ、むこうからお引き取り下さいと言われて買ったんであつて……。(サンケイ抄)

あゝ思うに あゝと感動して考えるのに。〈嘲かに委る、筈にし人選りて彼の怨を報

ゆることを。嗚呼惟ふに、怨報朽ちず。……(日本霊異記下、生物の命を殺し(怨を結び、狐、狗と作りて互に相報するは第二))

あゝしまった あゝ、失敗した。失敗などに思い当たつて驚く様子。

あゝしやこしや あゝ笑うはやしことば。ペ宇陀の 高城に 鳴鶴が 我が待つや 鳴は障らず いすくはし 鷹が障る 前妻が 菜乞はさば 立楓の実の 無けくを こきしひるね 後妻が 菜乞はさば 拾 実の大けくを こきだひゐね。 ええ、しやこしや。こはいこのふぞ。ああ、しやこしや。こは嘲嘆ふぞ。(阿々音引志夜胡志夜。此者嘲嘆者也)(古書記中)「(宇陀能多加紀爾(略)エエンヤコシヤ此の辭ここに脱す、下に出づるは解也、宇波那理賀(略)アアシヤコシヤ此の辭脱する事上の文と同じ、エエンヤコシヤ、アアシヤコシヤ、此の二句は、本末語の終るごとに嘲り云ふ辭也、下に音声を註す、書紀には来目歌終りて、又嘲り言あり、阿々(略)エニ、云云、アア云云は上の歌の本末の下に有るを、此所に其の音声を解釈する也、エニ、アアは共に歎息の辭にて音を引く、シヤコシヤはをかしやをかしやと嘲笑言と本文の註也、(略)(古事記謡歌註・内山真龍)

あゝしやを あゝ笑うはやしことば。(廣、復唯類者無し。皇軍大きに悦びて、天が仰

ぎて笑ふ。因りて歌して曰はく、今はよ
今はよ ああしやを(阿々時夜場) 今だ
にも 吾子よ 今だにも 吾子よ 今来目
部が歌ひて後に大に晒ふは、是其の縁
なり。(日本書紀三、神武) (阿々時夜場
○私記に阿々者笑也、時多「夜」場者猶
言「乎加之」といへるは当れり、新撰字鏡に
可笑を阿奈遠加之とあり、阿奈と阿々は同
韻にて同語なり、遠加を約むれば和の一言
となる、その和は上の阿々の余韻に含めれ
ば省けり、下の場は与に通ふ乎にてあなを
かしよといふ言とこそ聞ゆれ、古事記に阿
々志夜、胡志夜とあるもあなをかしや、是
はをかしやといふを省き約めしにやあら
ん、(日本紀歌解規乃落葉・荒木田久老) (

ああ付けたよ ああ(と口を大きく開いて)
うまく付けた(とほめる)。

ああとかたぶく「ああああ」と反応して、
首をかしげる。(へいともものあはれに眺めて
おはするに、御方参り給ひて日中の御加持
にこなたかなたより参りつどひ、もの騒が
しきのしるに、お前にこと人も候はず、
尼君所えていと近く候ひ給ふ。「あな見苦
しや。短き御几帳引き寄せてこそ候ひ給は
め。風など騒がしくて、おのづからはころ
びの隙もあらむに。医師などやうの様し
て。いと盛り過ぎ給へりや」などなまかた

ああ——あい

はらいたく思ひ給へり。由めきそして振舞
ふ、とは寛ゆめれども、もうもうに「老々
に」耳もおぼおぼしかりければ、「ああ」
とかたぶきてゐたり。さるはいとさ言ふば
かりにもあらずかし。六十五六の程なり。
(源氏物語若葉上)

ああと笑う 感情をこめてああと笑う。

ああ春々 ああ、春よ春よ。ああ、春だ春だ。
春に対する呼び掛けや詠嘆。へ於春春大なる
哉春と云々(松尾芭蕉向之岡)

ああほしい ああ、手に入れない。願望を表
す。へああほしいなあ百両に人たかり(柳
多留二〇、三二)

ああ喜ばしきかな ああ、喜ぶべきだ。ああ
と喜びの感動の声を発し、快く満足する気
持ちを表す。へ吾先に斯の像を失ひて、日
に夜に恋ひ奉る。今邂逅に遇ふ。嗟呼、慶
しきかな(日本霊異記上、口知識、四思の為に
絵の仏像を作り、驗有りて、奇しき表を示す縁
第三十五) (へ賛に曰はく、嗟呼慶しきかな、
三間名の千坂の氏の大徳、内に聖心を密に
し、外に凡形を現し、俗に著き色に触れ
て、戒珠を染めず。没するに臨み西に向か
ひて、神を走せ異を示す。誠に知る、是聖
にして凡に非ざることを。(同下、沙門、功
を積みて仏像を作り、命終はる時に臨みて、異
しき表を示す縁第三十)

ああ喜ばしきかな ああ、喜ぶべきだ。ああ
と喜びの感動の声を発し、快く満足する気
持ちを表す。へ吾先に斯の像を失ひて、日
に夜に恋ひ奉る。今邂逅に遇ふ。嗟呼、慶
しきかな(日本霊異記上、口知識、四思の為に
絵の仏像を作り、驗有りて、奇しき表を示す縁
第三十五) (へ賛に曰はく、嗟呼慶しきかな、
三間名の千坂の氏の大徳、内に聖心を密に
し、外に凡形を現し、俗に著き色に触れ
て、戒珠を染めず。没するに臨み西に向か
ひて、神を走せ異を示す。誠に知る、是聖
にして凡に非ざることを。(同下、沙門、功
を積みて仏像を作り、命終はる時に臨みて、異
しき表を示す縁第三十)

ああら 感動して発する声。驚きあきれて発
する声。ああら。へ玉手はすつくと立ち
上がり、「略」と。飛びかかつて俊徳の
御手を取つて引つ立つる。「アムラ磯らは
し」とふり切るを。はなれじやらじと追ひ
廻し。ささへる姫を踏み退け蹴退け。へ撰
州合邦辻合邦内の段・管専助へああらめづ
らしやへこはい土左衛もん(柳多留一四、
二二)へああらおもしろからずの雪の供
(同二〇、二六)

ああんときをあく ああんときを大きく開
く。(へ略)あるじ鉄にてのべたる、ちやし
やくのやうなるものを持ち出し)「ドレド
レズとこちへよつてくちをあかんせ。北
「ハイハイアアン(ト、くちをあく) ある
じ「ハテえらう大きなくちや。そしてい
こ不掃除なこつちやの。齒くそだらけち
や。これちやをなごなぞはいやがるちやあ
る。(続東海道膝栗毛初下・十返舎一九) (

ああんときをあける ①ああんときを大きく
あける。必要があつて大きく口をあける。
②びっくりしたり、失望してがっくりした
りして、口を大きくあける。

あい 応答の声。「はい」「えい」「ない」「へ
い」などが相手を深く敬う応答の声である
のに対して、敬意の点でそれに次いだ応答
の声。鼻にかけていうときは、うちとけた

「うう」が続いた。ヘエ訳もない事云はしやんすな。わしや尼に成る事いやぢやいやぢや。アイいやでござんす。(摂州合邦辻合邦内の段・菅専助)「アイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ。スリヤそちが生れ月日が妙薬に合うた故。一旦は癩病にしてお命助け。又身を捨てて本腹ささうと。それで毒酒を進ぜたな。」「アイナア。」(同)「へ松魚。御国家の侍、大小いかめしく居酒屋にかかり、」なんと、酒のよろしいがあるか」「ハイ、ござります」「一盃熱燗にして出しやれ」「ハイ唯今。マツお上りなされませ。」折ふし、初松魚辰巳上りに走り違ふ。「コレコレ松魚、直段は何ほどぢや」「アイ、お前もこの松魚を買ふ氣かえ」「コレコレ何をいふ。我らどもだとて、松魚を食ふなどいふお触れもない。何ほどぢや」「アアイ、こつちの一本は、ちとつきなやうだ。エエ一貫よこしねえ」「ラツトヨシ。一文も侍が値切りはせぬ」松魚死「おめえは見上げた。刺身にしやせうか」「イヤイヤ、一貫のつもりにして、八文がくりやれ」。(民和新繁・九尺庵蘭陵山人)「コレ、そばやさん。薬を飲むから、御無心ながら、湯をちつと、くんないさい」そばや「アイ」と、湯を汲んで出せば、(臍繰金空腹・十返舎一

九
▽

相愛する 互いに愛する。〈凡そ相愛する二ツの心は、一体分身為孤立する者でもなく、又仕ようとして出来るものでもない故に、（浮雲第八回・二葉亭四迷）〉

* 合縁奇縁 合縁と奇縁。合縁も奇縁による。

互いによく和合する縁も不思議な因縁による。夫婦や友だちどうしのうまくいくのも、いかないのも、不思議な因縁によるといへ。

★あいきょうがある ①魅力がある。かわい
い。人を引き付ける。人好きがよい。人好
きがする。②にこにこしている。やさし
い。ていねいで愛がこもっている。愛想が
いい。△波動は、ひとりびとりの人間のた
たずまいからおこってくる。たとえば末造
だが、かれは、きれいすぎで、おしやれで
あり、いつも身の廻りをりっぱにするのが
道楽だ。外目には、頼もしげで、気がきい
ており、優しい様子で愛敬もある。……

（雁解説・稲垣達郎）

あいきょうがこぼれる　かわいらしさ、人好
きのよさが流れ出る。今この頃ばかり、御
暇のひまひまに、この僻事も直させ給ひて
んや」と聞え給へば、「人の師なんどすば
かりにて、直さるばかりの僻事にては侍
らじものを」とて、うち笑ひ給へる、「愛

あいきょうがない ①人好きが悪い。人好きがしない。②やさしくない。ていねいではない。愛想が悪い。

あいぎょうづく あいぎょうがある。あいぎょうがあふれる。人づきがよい。人好きがする。《六の宮、(略)かはらけとりて左のおとどに参り給ふを見れば、いと小さくひちちかに、ふくらかに愛敬づき給へり。》
 (宇津保物語九 蔵びらき上)《顔のきよげに愛敬づきあらうしき事、殿上童ともいひつべし。(同一六、楼の上の下)》へ少将、いかがあると、ゆかしうて、几帳のころびより、臥しながら見給へば、白き桜、搦練など、よからねど、かさね着て、面ひうらかにて、北の方と見えたり。口つき、あいぎやうづきて、少しにはひたる氣つきたり。清げなりけり。ただ眉の程にぞ およづけ、あしげさも少し出であたりと見る。
 (落窪物語一、北の方、女君の鏡箱を求めぬ)《今一人は、東向きにて、残る所なく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小桂だつもの、な

いがしちに著^{ちか}なして、紅の腰引き結^{むす}へる際^{とき}まで、胸あらはに、凡俗^{はんぞく}なるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶつぶと肥えて、そぞろなる人の、頭つき、額つき物あざやかに、まみ、口つきいと愛敬つき、はなやかなるかたちなり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下端、肩の程いと清げに、すべていと拗^こけたる所なく、をか

しげなる人と見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく見給ふ。心地ぞなほ静かなる気を添へばやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ。(源氏物語空蟬)へ幼くより、いづれの御方にも隔てなく、殿の、ならはし給へれば、女房なども、見えたてまつらぬはなき中にも、この御方には、みづからも、わららかに愛敬つき給へる御心ざまにて、わざと、隔て給ふ事もなかりけり。紅のきぬ、あまたが上、桜の固文なる着給へるかたち、はなばなと清げに、「盛りは、ましていかばかり見るかひあるべき御さまなりけん」とぞ見え給へる。(狭衣物語三)

*あいきょうを振りまく だれにでもあいきょうを注ぎかける。だれにでもどんなあいきょうを分け与える。すべての人にえがおで接する。

愛犬 愛する犬。かわいがっている犬。飼

あい——あい

犬。へ愛犬の耳斬りてみぬ あはれこれも

物に倦^うみたる心にかあらむ (二握の砂・石川啄木)

合^あいことば ①合うことば。合わせること

ば。戦争・夜討ちや、物取り・押し入り強盗や、けんかなどで、前もって打ち合わせしておく合図のことば。②広く、お互いの中だけのことば。仲間うち隠語。

あいさつもそこそこにあいさつも、急いで、じゅうぶんでなく。急いで、あいさつもじゅうぶんにしないで。へ皆々おくり出て、挨拶そこそこにひきわかれ、(東海道中膝栗毛二下・十返舎一九)

(こどもを)愛する こどもなどをかわいが

る。へここに物好きな全盛の太夫、人のこはがる雷の鳴り渡るを喜び、日ごろ雷の子がほしいと愛がしてみたいと望みしに、ある日、随分ふかまの客、揚屋で太夫と一座して、「これ太夫す。おれは此の間、北国へ年礼に行て、珍なものをもらうてきた。そなたの欲しがる雷の子を、いま一つあらば、目貫にもしてみたいくらゐ。紙入に入れて来た」「それは、ヨヲうれし。早う見せておくれいなア」「うつかり持ちちゃんな。逃げるぞ」「ヨヲかはいらしい」と、手の内にてしばらくあいし見る内に、太夫のふところへ、フト飛び込む。(立春断大集三

九、雷の子・後素軒蘭庭)

*あいそ(愛想)がいい ①にこにこしていて、人当たりがいい。②ていねいで情のこもった言い方をする。口先がうまい。③人あしらいがいい。客の扱い方がうまい。

(*)あいそ(愛想)が尽きる 何々に好意がもてなくなる。何々がいやになる。何々に絶望する。何々を見限る。

*あいそ(愛想)が悪い ①冷たい顔などをして人当たりが悪い。②ていねいな情のこもった言い方ができない。物の言い方がまずい。③人のあしらいがへたである。客の扱い方がまずい。

*あいそもこそも尽き果てる すっかり愛想が尽きる。全くいやになってしまふ。「こそ」は、語呂で重ねて口調を合わせたもの。

*あいそを尽かす 好意が持てなくなる。いやになる。絶望する。見限る。

*あ痛 ああ、痛い。

間 その間。その中。その時間の間。その物と物との間。物の中。へ杉苗 杉苗売を呼んで買ひ取り、直ぐに植あさせける。「枯れはせまいか」「請け合ひます。枯れはいたしませぬ」「それでも去年、その方が植あたる杉は、大方枯れたぞよ」「間には枯れるもござります」「それでは請け合ふではない」「なるほど、さやうではござれど

も、この苗売も医者の方で、間に枯れねば、私どもが咽が干ます」。(飛談語・宇津山人 葛蒲房)

あいた口へもち ちようど口が開いているところへ、うまくもちが落ちて来る。あいた口へばたもち。偶然幸運が舞い込んで来るたとえ・ことわざ。へ金兵衛おもひもよらざること、いと不審におもひけれども、これさいはひ福徳の三年目、あいた口へ餅、天へも上がるこちして、則ち驚籠に打ち乗りて、いづくをあてともなく出でゆきける。(金々先生栄花夢・恋川春町)

あいつちを打つ ①あい(間)につちを打つ。いっしょにつちを打つ。焼いた鉄を師匠が打つと、そのあとちよつと間を置くだけで、でしがつちを打ち入れて、互いにつちを打つ。②人の話にことばを添えてほどよくとりなす、話の調子を合わせる、調子を合わせて話をおもしろくする様子・たとえ。へうぬ惚るる友に 合槌うちてあぬ施手をするとき心に(一握の砂・石川啄木)

あいよりいでてあいより青し 青はあいから取ってあいより青い。でしが師匠よりもすぐれる、影響を受けた後進者がその先輩よりも進むなどのたとえ。

青い ①色が青い。青い色だ。(影南山を浸

して青くして混濁たり。(平家物語七、火打合戦) ②心配や恐怖で血の気がなくなつて青い。(木曾は箸取り食ひけれども、中納言は青く興醒めてめさず。(源平盛衰記 三三、光隆卿木曾が許に向ふ) ③病氣などで顔色が悪い。④若い。未熟である。

青くなる ①青色を帯びる。②顔色などが青白くなる。顔色が悪くなる。③驚いたり恐れたりする様子・たとえ。(でん「ほんによ能い加減にだまされ居る友達の顔がよござらア熊」へ。尿でもぐんべえ団こつちがだましてやるのだアでん「又つぎ出されて青くならうと思つて(浮世床初上・式亭三馬)

青田刈り ①稲の青々とした田を刈ること。青々とした田の稲を切り取って収めること。稲のまだ実らない田を刈ること。まだ実らない田の稲を切り取って収めること。②まだ卒業していない学生生徒を雇用契約をすること。修学中の学生生徒と雇用契約を結ぶこと。(このように大学と学生とを本来の使命や目的から外させるやうにしてしまったのは企業者の責任である。青田刈りは誠に慎んでもらいたいものである。)

青田を刈る ①稲の青々とした田を刈る。青々とした田の稲を切り取って収める。稲のまだ実らない田を刈る。まだ実らない田を

切り取って稲を収める。(凡そ京中には源氏の勢満ち満ちて、在々所々に入り取り多し。賀茂、八幡の御領とも言はず、青田を刈りて馬草にす。(略)木曾大いに怒つて、「我信濃を出いでし時、小見、合田の戦より始めて、北国には、砥浪山、……、西国には、福龍寺繩手、……を攻めしかども、未だ敵に後ろを見せず。縦ひ十善の帝王にましますとも、甲を脱ぎ弓の弦を弛いて降人にはえこそ参るまじけれ。譬へば都の守護して有らん者が、馬一匹づつ飼うて乗らざるべきか。幾らも有る田共刈らせ馬草にせんを、強に法皇の咎め給ふべき様やある。(略)」とて打つ立ちけり。(平家物語 八、鼓判官) (木曾是を聞きて申しけるは、「平家の謀叛を起して君を君ともし奉らず、人をも損じ民をもなやまし、悪行年久しきによりて、義仲命をすてて責め落して、君の御代になし奉りたるは、希代の奉公にあらず哉、それ何の咎めあつて、只今義仲をうたるべきや、東西の国々ふさがつて都へ物ものぼらず、もて来る方もなし、餓飢して死ぬべければ、命を助からんために、兵糧米をとり、青田を刈らせて馬に飼ふ、力及ばざる事也、さればとて王城を守護してあらん者が、馬一疋宛のらせではないかであるべき、(略)」といひけれ